

平成28年度 かながわ子ども人権相談室事業
子ども人権推進事業啓発作品集

<テーマ>

たいせつなもの、 たいせつなひと

子どもたちの想いに
耳を傾けてみましょう



神奈川県立総合療育相談センター

△テーマ▽

たいせつなもの、 たいせつなひと

この作品集は、子どもの権利に関する条約第十二条「子どもが自分の意見を言う権利」の確保のため作品募集を行い、その入選作を収めたものです。

目次

標語の部

詩の部

大好きな妹

ともだち

作文・エッセイの部

夏の訪問者

たいせつなひと

日比 崇太 (平塚市)	小学校六年	3
はねだこうけん (鎌倉市)	小学校一年	3
はら ひより (厚木市)	小学校一年	3
小田 唯鈴 (湯河原町)	小学校六年	3
柏木 涉 (湯河原町)	小学校六年	3
安西 那々美 (湯河原町)	小学校六年	4
中 海莉 (湯河原町)	小学校六年	4
木村 修士 (湯河原町)	小学校三年	4
高木 晴知 (平塚市)	小学校六年	4
えんどうさち (綾瀬市)	小学校一年	4
こしのしんたろう (鎌倉市)	小学校四年	5
細田 来美 (大井町)	小学校二年	6
斎藤 七菜子 (藤沢市)	小学校四年	7
太田 らいと (厚木市)	小学校二年	8

僕の大切な人達

いままでありがとう

「命のバトン」をつなぐ

ひいおばあちゃん、ありがとう

思い出のたから物

介護者の心〜私ができること〜

祖母が教えてくれたこと

「大切な家族」

一日一日を大切に

大切な妹

祖母の今、私の未来

支えを受けて気付くこと

美しい風景

たいせつな名前

四コマ漫画の部

井上 廉 (三浦市) 小学校四年 …… 9

S・A (秦野市) 小学校四年 …… 10

中村 優護 (鎌倉市) 小学校五年 …… 12

峯 帆南 (湯河原町) 小学校四年 …… 13

瀬谷 翔亜 (平塚市) 小学校三年 …… 15

大黒 茜 (横浜市) 中学校二年 …… 16

嶋田 詢子 (逗子市) 中学校二年 …… 17

牧野 有真 (鎌倉市) 中学校二年 …… 19

星崎 あかり (横浜市) 中学校二年 …… 20

茂田 美々莉 (横浜市) 中学校二年 …… 22

堺 理沙 (藤沢市) 中学校二年 …… 23

水田 楓 (鎌倉市) 中学校二年 …… 25

田中 佑菜 (茅ヶ崎市) 中学校二年 …… 26

小島 和恵 (厚木市) 中学校二年 …… 28

松浦 龍星 (秦野市) 小学校三年 …… 30

谷川 萌音 (鎌倉市) 中学校一年 …… 31

杉山 由莉 (横浜市) 高校三年 …… 32

子どもの権利に関する条約の主な内容

…………… 33

あとがき …………… 35

伝える度に 笑顔がうまれる 魔法の言葉 「ありがとう」

日比 崇太 (平塚市 小学校六年)

うれしいな ママのおなかに しんぞうだ

はねだ こうけん (鎌倉市 小学校一年)

ちいさなからだ ひとりのにんげん

たいせつにして わたしたちのこと

はら ひより (厚木市 小学校一年)

優しさは 心に大きな 花が咲く

小田 唯鈴 (湯河原町 小学校六年)

つらくても 命があれば

笑えるよ 大切なもの 命だけ

柏木 渉 (湯河原町 小学校六年)

「おはよう」「おやすみ」 これからもずっと 言いたいな

安西 那々美 (湯河原町 小学校六年)

ごめんねが みんなのおかげで 言えたこと

中 海莉 (湯河原町 小学校六年)

おるすばん いないとさびしい お兄ちゃん

木村 修士 (湯河原町 小学校三年)

考えよう 今自分がやっている事 されている人の気持ち

高木 晴知 (平塚市 小学校六年)

あさごはん まいにちおいしく いただきます

えんどう さち (綾瀬市 小学校一年)

大好きな妹

妹が生まれたから心がふかふかになった

妹は全部が可愛い

妹の足

妹の手

妹の顔

妹の全部が可愛い

これから大切に可愛がってく

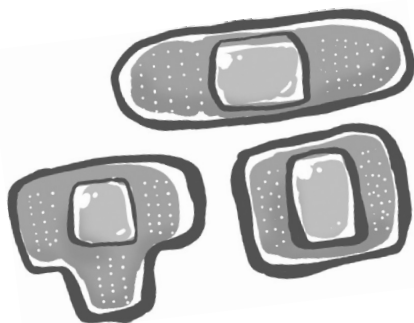
生まれてきてくれてありがとう。



こしの しんたろう (鎌倉市 小学校四年)

ともだち

学校のかえりみち
わたしはいそいでいて
ころんでしまった
いたかった
ちもいっばい出た
そしたらちかくにいたともだちが
ティッシュでちをふいてくれた
もう一人のともだちは
ばんそうこうをおうちまで
とりにいってくれた
そしてきず口にはってくれた
ともだちのやさしさが
うれしかった
ところがポカポカした
けががおったような気がした
わたしもともだちに
やさしくしたい



夏の訪問者

私のネコ好きはハンパない。ネコの番組はぜったい見るし、ペットショップに行ったらずっと見つめてる。

ある日、家の近くで「ニャー。」というなき声が聞こえた。見てみると、まだ小さい黒ネコがすわっていた。「こっちおいで。」と言ったら、よってきて頭を足にすりつけてきた。私が「クロ。」とよんだら家の前までついてきた。おなかをすかせていたのでエサをあげてみたら、一缶半ペロリだった。お父さんは「明日から、このネコは家にごはんを食べにくるよ。」と言っていたのでともうれしかった。ネコが大好きでお世話もしてみたいと思っていたからだ。次の日、エサをあげた所にクロが待っていた。家を気に入ったらしく、毎朝決まった時間に来るようになった。それからは昼寝をしたり、六時間くらいいるようになった。クロと出会って一ヶ月たった時、お母さんの友達から「かえないのなら、保護ネコ団体にあげた方がいいよ。」と言われ

た。家族で相談して保護ネコ団体にクロをおねがいすることにした。電話をしてみると、予約がいっぱいと言われてしまった。本当はクロと別れたくなかったから、心の中で大よるこびした。でも、クロが一番幸せに生きていくためにはどうするのがいいのかをみんなで考えた。すると、お母さんが「私達で里親をさがそう!」と言った。私はこのままクロとすごしていたかったので「あちゃー。」と思った。そして、私とお母さんでポスターを作って近くのコンビニにはってもらった。ポスターをはりだして一週間ほどたったある日、知らないおじいさんから電話がかかってきた。ポスターを見て、黒ネコちゃんかほしいという事だった。私はそんなに早くみつかると思わなかった。私はそんなに早くみつかると思おじいさんにもらってもらう事になった。お母さんはすぐくよるこんでいたけど、私はまったくうれしくなかなかった。前にお父さんから「クロと別れる時がくるけど、泣かないようにしようね。」と言われていたので、さびしかったけど何も言わなかった。数日が

たちクロをおじいさんの所につれて行く日がやってきた。クロをダンボールに入れて車に乗ったら、いやがつてにげてしまった。おいかけてよんでみてもこわがつてぜんぜんこなかった。ダンボールではダメだったので、ネコをかっている友達からネコバッグをかりた。クロはおなかがすくと必ず来るのでがまん強くまった。予想どおりおなかをすかせたクロがやってきた。すきをねらつてバッグに入れることができた。ビツクリして今まで聞いた事のない声を出しているクロに私は「大丈夫だよ。」と言いつづけた。これからクロの飼い主になるおじいさんはとてもやさしい顔で「大切にします。」と言ってくれた。さびしいけれど、これからクロがやさしいおじいさんにかわいがられて幸せになるといいなと思った。

齋藤 七菜子（藤沢市 小学校四年）

たいせつなひと

ぼくのたいせつな人は、五人います。それは、おとうさんとおかあさんとおねえちゃんとおにいちゃんとおとうとです。おとうさんはいつもかぞくのためにしごとをがんばってくれます。おかあさんは、毎日そうじやせんたく、かぞくのごはんをつくってくれます。ぼくがいちばんすきなおかあさんのおりようりは、とりのからあげです。カリカリするところがおいしくてたまらないです。だから、からあげの日は、うれしくておかわりをします。中学生のおねえちゃんは、べんきょうができてあたまがいいです。字もとてもキレイです。たまにぼくのしゅくだいをみてくれます。ぼくがわるいことをしたらおこられます。とてもこわいです。ぼくはないてしまいます。でも、いつものおねえちゃんは、やさしいです。おにいちゃんとは毎日けんかをします。ぼくは、口はつよくてかてるけどおにいちゃんはパンチをします。なので今はかてません。くやしいので空手のけいこをがんばっ

て、いつかおにいちゃんみたいにつよくなってかちます。けんかをしないときはおもしろいどうがをとってあそんでいます。おとうとは、まだ二さいです。ぼくのことをいつも「ライライ」とよびます。とても手が小さくてかわいいです。さいきは、すこししゃべるようになりまし。ぼくのことをすきと言ってくれます。うれいす。ぼくはおとうとのえがおがかわいくてすきです。ぼくにはおねえちゃんとおにいちゃんとおとうとがいます。とてもよくばりでしあわせです。

太田 らいと（厚木市 小学校二年）



僕大切な人達

僕が生まれてきた時は元氣だとみんな思っていたみたい。体と白目が黄色くて黄だんというものが出ていたそうです。ミルクをのんでも吐いてしまったり、うんちがいつぱい出て服も何度も取り替えたり身長、体重もふえず大變だったみたいです。心配で病院に行つて、みてもらつても大丈夫と言われたと聞きました。市の検しんでも大丈夫ですと言われたのでお母さんも大丈夫なのかなーと思つたみたいですが、やっぱり變だと思つて大きい病院で検査をしてもらつたそうです。そこでかんぞうに病氣があるとわかりました。胆道閉鎖症という病氣でした。とても大きな病院に救急車で行き入院することになったそうです。僕の肝ぞうはかたく少し肝硬變になっています。僕が聞きました。自分の肝ぞうは一年位しかいきれないと先生から言われたそうです。生体移植手術を受けました。お母さんの肝ぞうを少しもらいました。僕のために色々な人が千羽づるを折ってくれ今でも大事にとつて

あります。入院も長かったみたいですが僕は赤ちゃんだったので覚えていないのですが、写真を見てその時の事を聞きました。手術時間は十八時間だったときいてびっくりしました。赤ちゃんなのにそんなに長い時間すごいな！と思いました。入院中は点てきや体に色々な物がついていたみたいです。

でもどんどん元気になって少しずつついた物が取れていったそうです。今は、二ヶ月に一回病院に行ってみてもらっています。生体肝移植手術を受けて九年目です。今はとても元気です。病院に行くと色々な病気の子どもがいてがんばっているのがたを見ると僕も色々がんばろうと思う。小さい頃の写真を見て親やおじいちゃん、おばあちゃんから色々聞いて、命の大切さもわかりました。家族、おじいちゃん、おばあちゃん、病院で出会った友達、学校の友達、病院の先生たち、かみごしさん達、僕の事をはげましてくる人達が僕の大切な大事な人達です。

井上 廉（三浦市 小学校四年）

いままでありがとう

今年の夏、とても悲しい出来事がありました。七月二十四日日曜日午後四時十一分に六十八才でおじいちゃんがたび立ちました。すぐく悲しかったです。

私のおじいちゃんは、約二年前、おなかにおできができて手じゅつをしました。手じゅつをした後は、薬を飲んでちりょうをしました。でもまた、調子が悪くなってしまい、病院に行きました。けれど、なかなかよくならず、歩くこともできなくなり、一人でトイレに行くのもむずかしくなっていました。だんだん食よくもなくなり、私がおはんをもつていった時も食べることができなくて苦しそうでした。おじいちゃんといっしょにお勉強をしたり、元気だった時のことを思うといいのか分からなくなってしまうました。家族が見守る中、こきゅうがだんだんゆっくりになっていくのを目にすると、私はなみだがあふれてきました。その後、こきゅうが静か

になつていき、息をひきとりました。

私とおじいちゃんの思い出は、数えきれないくらいいっぱいあります。その中で一番楽しかった思い出は、大みそかに行うおそば作りです。三才の時から毎年おじいちゃん、お姉ちゃん、私の三人できょう力して年こしそばを作っていました。おそばを作るのは、すぐくむずかしくて大変だけど、みんなに食べてもらえるのがうれしくてがんばりました。また夏休みに私の家族、おじいちゃん、おばあちゃん、いとこの家族と行く大いそロングビーチでもみんな泳いだり、流れるプールに入るのが、楽しくてあつというまに一日がすぎてしまいます。秋の運動会では、おじいちゃんが、おうえんしてくれていたので、リレーの時もとても心強くて全力を出しきることができました。

おじいちゃんからのプレゼントはたくさんあります。キーボード、たくさん練習したので両手でいろいろな曲をひけるようになりました。私の大すきなピンクとむらさき色の自転車は、たから物です。ランドセル、おじい

ちゃんと選んだ一番大事な物、大切に使っています。

私は、生きていると、悲しいこと、楽しいこと、いろいろなことを体験しながら生活するということが分かり、生きることの大切さを知りました。

これからは、毎年行っていた、おそば作りを続けてもつとおいしいおそばを作れるようになりたいです。そしておじいちゃんを喜ばせたいと思います。おそば作りだけでなく、どんなことがあっても、いろいろなことにちようせんしてがんばっていきたいです。

「おじいちゃん、大事なことを教えてくれてありがとう。」

S・A（秦野市 小学校四年）



「命のバトン」をつなぐ

七月三十一日は、何の日だか知っていますか。それは六千人もの命を救った外交官杉原千畝の命日です。今年2016年で没後三十年になりました。千畝さんがビザを発行することで生き延びられたユダヤ人難民の子孫の数は現在四万人以上にもなるそうです。そのため海外で千畝さんは高い評価を受けています。例えばイスラエルのネタニヤ市では、その名前を冠した「杉原千畝通り」ができました。現地では記念式典も行われるほどの栄誉が与えられています。千畝さんは、晩年には鎌倉市で暮らし、今は鎌倉霊園に眠っています。私の住む鎌倉市でも、その業績が顕彰され、ご家族へと引き継がれているのです。

千畝さんは第二次世界大戦中、リトアニアの外交官でした。ナチスの迫害から逃れてきた多くのユダヤ人を救うため、「命のビザ」を手がしびれるほど書き続けたのでした。

戦争中に外交官である立場を考えると、ビザを出すのは難しい「決断」だと思っています。

しかし千畝さんは、「私を頼ってきた何千人ものユダヤ人の方々を決して見殺しにできなかった。たいしたことをしたわけではなく、当然のことをしたただけだ。」と語っています。

第一次世界大戦に負けたドイツは、多額の負債を抱えて国内の物価が上がり多くの人は仕事を失い苦しんでいました。この経済危機を背景にしてヒトラーが登場し、ナチスドイツも誕生しました。不況で苦しむ大衆の不満を社会的な弱者やユダヤ人へと向け、「ホロコースト」と呼ばれる大量虐殺もしました。ユダヤ人は古代から中東に暮らし、ユダヤ教を信じる人々ですが、ヨーロッパでは、よそ者扱いをされ、迫害された歴史があります。しかし、ユダヤ人は努力して銀行や商店で成功し、お金持ちでした。ここに目をつけたヒトラーは、ドイツが貧しく苦しいのは、ユダヤ人のせいだとして「生けにえ」にしました。さらにドイツ人だけの純粋で優越した国家を作るため心身の不自由な方々や多くのユダヤ人も強制収容所へと送り込み、大量虐殺をしました。このようにとても悲惨な出来事を、

私たちは決して忘れてはいけません。

ここで強制収容所から生き延びたユダヤ系
イタリア人生存者の詩の一部を紹介します。

「暖かな家で 何ごともなく生きている
きみたちよ

家に帰れば 熱い食事と友人の顔が見られ
るきみたちよ

これが人間か、考えてほしい・・・こうした
事実があったことを・・・心に刻んでいてほし
い 家にいても、外に出ている

目覚めていても、寝ている そして子
供たちに話してやってほしい・・・」

千畝さんの命日、妹の誕生日と同じ日に、
私は鎌倉霊園へ行き、お墓の前で祈りました。
生き残れない人々を、生まれて来た私たち
が、心に刻みながら、その記憶と希望を、未
来へ伝えたい。そして、杉原千畝さんのよう
に、世界へと、「命のバトン」をつなぎたい。

中村 優護（鎌倉市 小学校五年）

ひいおばあちゃん、ありがとう

私のひいおばあちゃんは、福島県に住んで
いて、大正十二年生まれの九十二才です。

そのひいおばあちゃんが、今年の五月十二
日に亡くなってしまいました。私はその事を
学校から帰ってお母さんに言われました。お
母さんはたまに冗談を言うので最初はうそだ
と思いましたが。でも、お母さんの目が泣きそ
うだったから、本当のことなんだと思いまし
た。もうひいおばあちゃんとお話が出きなく
なると思うと、さみしいです。

ひいおばあちゃんとの一番の思い出は、
九十才のたんじょう日会のことです。しんせ
き全員が集まってお祝いをしました。その時
にみんなでおもちつきをしていると、ひいお
ばあちゃんもきねを一人で持つてもちつきを
始めたので、皆がおどろきました。私は、自
分は手伝った方がいいのかなと思いつながら、
見ていました。九十才をこえてまだまだ体力
はあるなと思います、おどろきました。そんな
ひいおばあちゃんですが、今年の一月にこしを

こっせつしてしまい、入院をしてしまいました。私がお見まいに行った時はそうぞう以上に苦しそうで、私はショックでした。あんなに元気だったひいおばあちゃんが、かわいそうになりました。早く元気になってひいおばあちゃんの好きな百人一首をいっしょにやりたいと思いつながら、家に帰ってきました。

でも、私の思いはかなわず、ひいおばあちゃんはその一週間後に亡くなってしまいました。お通夜とおそう式のためにまた福島へ私は行きました。死んでしまったひいおばあちゃんの顔を見て私はもう少し生きてほしかったと思います。

おそう式では、私の知らないいろいろな人が来ていて、ひいおばあちゃんはお友達がいっぱいいですごいと思いました。私にとって初めてのおそう式でした。おしようこの意味ややり方など、初めて知りました。おそう式というのは、亡くなった人を安らかに天国へ送り出すための式なんだと私は思います。そして火そう場へ行き、ひいおばあちゃんに、最後の別れをしました。人の体がほねだ

けになるすがたは、少し怖いと思いました。そのほねをみんなで拾って、つぼに入れました。私にとつては初めてのことだからいろいろな事を知ることが出来ました。

私のひいおばあちゃんは、九十二才で亡くなったけど、若いのに亡くなってしまう人や事故にあってしまう人など、いろいろな死があるけど、不公平なので、じゅみようはみんな同じ年だと思います。

私もふくめて、家族全員が九十二才まで生きていられれば、いいと思います。

最後に、ひいおばあちゃんが亡くなったのは、悲しいけど、いろいろな事を教えてもらった気がします。今までありがとう。天国で大好きな百人一首を楽しんで下さい。

峯 帆南（湯河原町 小学校四年）



思い出のたから物

ぼくは、一年生の時に野球を始めました。お父さんが公にんしんばんをしていて、お兄ちゃんもお姉ちゃんも野球をやっていたので、小学生になったらぜひ一しよに野球をやるぞときめていました。

ぼくはまだ、すごく小さかったので、一番小さいサイズのグローブをお父さんに買ってもらいました。お父さんは毎日野球を教えてくれました。グローブがやわらかくなるまでキャッチボールをしました。

少年野球のチームに入ったので、土日は朝から夕方までずっと野球をしています。だから、ボールも遠くにとばせるようになったし、速いボールも取れるようになりました。だんだん試合にも出れるようになったし、お父さんもたくさんほめてくれました。

だけど、ぼくが一年生の秋に、お父さんはし事中になくなってしまいました。すごくかなしくてつらかったけど、野球をしている時は、いやなことわすれてしまいます。お父

さんに買ってもらったグローブを見ると、お父さんを思いだしてがんばれる気がするからです。

ぼくの手はさいきんちよっと大きくなってきたので、新しいグローブを買ってもらいました。だけど、お父さんに買ってもらったグローブは、ぼくのたから物です。

ぼくはこれからもずっと野球をやっているときめているので、あと何回もグローブを新しくしないといけないと思います。でも、はじめて買ってもらった小さいグローブは、今も大じにつくえの上にかざっています。お父さんとの思いでがたくさんあるたからもののグローブを、ずっとずっと大切にしていきたいです。

瀬谷 翔亜（平塚市 小学校三年）



介護者の心へ私ができることへ

近年、ニュースや新聞などで「高齢者」に関する話題が多く取り上げられています。その中で私の目に止まったのは、「高齢者虐待」という記事です。ニュースでもよく耳にしますが、私には高齢の祖母がいるのでこの話題を聞くとき切れない気持ちになります。「高齢者虐待」はなぜ起こるのでしょうか。

私の祖母は認知症です。私の名前を思い出せなかったり、私の事を自分の姪だと思っていたりします。そんな時私は「なんで忘れてしまうのだろう。」と悲しくなります。また、同じ事を何度も聞かれると「さっき言ったのに。」とイライラしてしまう事もあります。「高齢者虐待」の原因の一つはこれかもしれないかもしれません。でも、どんな理由があっても、暴力をふるったり、嫌がらせをしたりするのはいけない事です。理由があるから虐待が許される、そんな事は絶対に無いのです。では、その「イライラする気持ち」を「虐待」に変えないために、どうしたら良いのでしょうか。

まず大切なのは、その人の過去を考えてみるという事です。祖母は、今は認知症で記憶障害がありますが、数年前までは仕事をもち、活躍していました。私も祖母に多くの事を教えてもらいました。祖母は努力をし、立派な人生を送っていたのです。それなのに、ここ数年の事だけを見て責めたり、怒ったりするのは、それは間違っていると思います。これは他の高齢者の方々にも言える事ではないでしょうか。その人にはその人の人生があり、人権があるのです。私達は高齢者に向き合う上で、全部をみる必要があるのです。

ただ、これだけではやり切れない部分もあるでしょう。母と話をしている、気づいた事があります。母は祖母の介助をしている中で、「一緒にいるとどうしてもイライラしてしまう事もある。けれど、私と同じ立場の人は沢山いて、その人もきつと同じ思いを持ちながら頑張っているんだろうと思うと前向きになれる。」と言っていました。母は、認知症の親を介助している人のブログを見ているそうです。母の周りには、母と同じ立場の人がい

ません。なので、このブログを見る事で、自分と同じ状況の人がいるというだけで元気が出るそうです。辛いのは自分一人ではないという考えは、介護・介助者にとつて大きな心の支えになります。その支えがあれば、高齢者に対して暖かく接し、人権を大切にできるのではないのでしょうか。

どんな理由があつても「高齢者虐待」はれっきとした人権侵害であり、絶対にしてはなりません。私の祖母も、私に多くの事を教えてくれた大切な家族です。「高齢者の今の姿だけを見るのではなく、その人の人生全てを考えてみる事」、「介護・介助者が、自分と同じ立場の人もいて、苦勞しているのは自分一人ではないと知る事」この二つによって私は、「高齢者虐待」のない、高齢者を大切にできる社会にしたいと思うのです。

大黒 茜（横浜市 中学校二年）

祖母が教えてくれたこと

「たいせつなもの、たいせつなひと」この言葉を聞いてみなさんは、何を思い浮かべますか。私は、「命」という言葉を思い浮かべます。この言葉を思い浮かべるようになったのは、二年ほど前の出来事からです。

二年前、私はまだ小学校六年生でした。中学入試を目前に控えた学年であるため、勉強に追われる毎日でした。でも、そんな日常の中でも楽しみな事がありました。それは、母方の祖母と電話で話したり、会いに行ったりすることです。家が近いので、週一回必ず祖母の家に遊びに行くことができました。祖母は、祖父が亡くなってからずっと一人なので、私達が来ると喜んでくれました。祖母と話すとき必ず言われる言葉があります。それは、私を励ましてくれる魔法の言葉です。

「詢ちゃんは、やればできる子なんだから自分に自信を持ちなさい。」

この言葉を聞くと、学校であった嫌な事も勉強のイライラも、自然と忘れることができ

ました。これらは、私の日常でした。でもそんなある日、突然私の日常が奪われました。祖母が体の痛みを訴え始めたのです。そしてそのまま緊急入院。次の日には、集中治療室に入りました。その日から祖母は、話すことも食べることも歩くこともできないことになりました。祖母の体には、いくつもの機械が繋がっていました。それから少したち、普通病棟へ移動することができました。でも、話したり食べたり歩いたり、色々なことができなままでした。そんな中迎えた中学入試の結果は、合格。そのことを祖母に伝えましたが、反応はありませんでした。でも、きつと喜んでくれたと信じています。それから祖母の容態は、少しずつ回復していったように思いました。微笑んだり、目を強く瞑るようになったりしました。でもその矢先、祖母は息を引き取りました。突然のことで、すぐに受け止めることはできませんでした。それから心に穴が空いたように寂しく感じる日が続き、勉強も捗らなくなりました。しかし、ふと思いついたのです。

「詢ちゃんは、やればできる子なんだから自分に自信を持ちなさい。」

あの魔法の言葉です。今となつては直接聞くことはできませんが、いつまでも心の中に残る言葉だと思います。この言葉は、私を励ます言葉でもあり、祖母の命がこの世に存在していたことを表す言葉でもあります。

この出来事を機に、「たいせつなもの、たいせつなひと」と聞くと、「命」という言葉を思い浮かべるようになりました。祖母の命は、私にたくさんの勇気を与えてくれました。人の命は、その人の傍にいる人に大きな影響を与えるものだと思います。だからこれからも、「命」を大切にしていきたいです。

嶋田 詢子（逗子市 中学校二年）



「大切な家族」

私は、久しぶりに家族と祖父の話をした。小学一年生になった年の九月に、とても大好きだった母方の祖父が亡くなった。祖母は、一人で住むのには大変だからと神奈川の私達の所に移住してきた。あまり会う機会がない私にとつては、祖母が来てくれた事はとても嬉しかったが、ともに祖父の死への悲しみも感じずにはいられなかった。亡くなった祖父はとても心優しい人で、私を慰めるのは一番上手だった。そして、マイケル・ジャクソンのモノマネが上手で、いつも家族を盛りあげてくれた。そんな祖父の話になぜなつたかというのと、一枚の手紙の影響だった。家にある仏壇に、供え物を置こうとした時仏壇の引き出しが気になった。「開けて」と誰かに言われていたようで、引き出しがとても気になつた私は、引き出しを恐る恐る開けて見るとうそくの入った箱の下に、一枚の封筒があつた。見覚えのない封筒で、なぜか封が開いていた。中には、二枚の便箋が入っていて亡く

なつた祖父の字にそっくりだった。私は「懐かしいなあ。じいじの字なんて本当に久しぶりに見た。」と独り言を言いながら手紙に書かれていた文を見た。それは母宛ての手紙の様で、母の名前が力強く思いを残すかのようにな書かれていた。内容を見て驚きと共に私の頬に涙が一滴ずつ落ちていく。全て、私への内容だったのだ。「けがをしないように見守つてあげて下さい。」等、祖父らしい優しい言葉が手紙には書き込まれてあつた。私は今までになく祖父が恋しくてたまらなかつた。その夜、家族に手紙を見せた。祖母も母も顔を見合わせて、私に笑顔を見せた。祖母が口を開けたのはその直後だった。「じいじはね、ガンで苦しい中、自分ではなく、私でもなく、あなたを心配していたのよ。体は大丈夫か？ご飯食べてるか？学校は行つてるか？つて。ずっとあなたの話だね。」そう聞いた瞬間、涙が止まらなくなつたのだ。私には四つ下のいとこが居るが、同じ孫の中でも私の話ばかりだったと聞いて、自分がどんなに幸せ者なのか、改めて実感した。私が六歳の頃、ヘル

ニアの手術をする前に、「手術が無事終わったらおもちやを買って。」というお願いをしていた。その時、すでにガンは発症していて、髪の毛はぬけ落ち帽子をかぶっていた祖父にとっては、買いに行くなんて大変な事だった。それなのに、本当に願いを叶えてくれたのだ。祖父の体の事をよく知らなかった当時の私は、祖父に甘え過ぎていた。そんな私のわがままを聞いてくれていた祖父への感謝は、伝えきれない程だ。亡くなって七年も経った今、今でも祖父が近くに居るように感じる。

私にとって何より大切なのは、家族。その中でも一番大切なのは、亡くなってしまった母方の祖父だ。小さい頃から優しくしてくれていた。私の大事な家族。もう居ないものの最後まで私を心配してくれた祖父に感謝です。

牧野 有真（鎌倉市 中学二年）



一日一日を大切に

みなさんにとって一番大切な人は誰ですか。私にとっての一番大切な人は『母』です。私の母は仕事も家事も頑張っていて、私のことも沢山可愛がってくれる自慢の母です。私が先日、急に手術と入院をすることになったときも仕事は猫の手も借りたい程忙しかったのに毎日お見舞いに来てくれました。私はこの間、そんな優しい母のことで、人生で一番と言っている程の大泣きをしました。

まだ寒さも残る三月下旬。ある友達から電話がかかってきました。あるバンドのライブのチケットを譲りたいという内容でした。私はそのバンドが大好きだったので、嬉しくてすぐさま母に伝えました。当然オーケーの言葉が出てくるのかと思ったら、母は渋い顔をして黙っていました。すると「だめ」という答えが返ってきました。母からこんな言葉が出てくるとは思いもしなかった私は呆然としていましたが、はっと我にかえってどうしてと聞くと、「このライブの次の日はあかりと

お母さん二人でバスツアーに行くから、体調が悪くなったら嫌じゃない。」そう返されました。なあんだ。そんなことか。私たちは体力もあるし、ライブに行ってもお母さんも体調なんか崩さないから大丈夫だよ。そう思った矢先、母の口から思いもよらない言葉が飛び出してきました。「お母さんね、今度手術するの。手術前に体調崩すと手術日が先延ばしになるの。だから・・・」もうそこから先は言葉が耳に入ってきませんでした。全ての音が遮断されてしまったかのように頭が真っ白になりました。「お母さん、死んじゃうの・・・かな」そう思った途端に涙があふれてとまらなくなりました。私の一番大切な人がいなくなってしまうと思うと、怖くて怖くて仕方がありませんでした。そんな気持ちと同時にさっきまで絶対ライブに行くと思地を張っていた自分が恥ずかしくなりました。私が落ちて着くと、母は「命に関わる手術じゃないから大丈夫よ」と言ってくれました。また、これはあとから聞いたのですが、私を心配させないようにとずっと手術のことを私に秘密にし

ておいてくれていたのです。そんな優しい気づかいがまた私の涙腺をゆるませました。

その後、私は誘ってもらった友達にライブに連れていってもらえ、母の手術も無事成功しました。

今回私はこの出来事があったて、改めて母はあたりまえな存在じゃない、いつも身近にいる人も皆、一緒にいることがあたりまえじゃないんだと、深く認識しました。人生はいつ何が起るかは誰にも分かりません。もし明日、あなたの大切な人が突然いなくなってしまうても、あなたは平常心でいられるでしょうか。私なら無理です。後悔することが沢山あると思います。そんな後悔をなくす為には「一日一日を一分一秒を大切に生きる」ということが不可欠なのではないでしょうか。

星崎 あかり（横浜市 中学校二年）



大切な妹

「ピッ！ピッ！ピッ！ピッ！ピッ！」

薄暗いNICU（新生児集中治療室）の中で鳴り響く電子音。看護師さんが駆けつけてくる。怖くて後ずさりする私に看護師さんは「大丈夫ですよ」と言う。私は目の前にあるクベースという透明な箱の中で、小さな体の至るところ管に繋がれた赤ちゃんをじっと見つめていた。十歳のクリスマス朝、私はこうして待望の妹と対面した。

そしてその日から、私の生活は一変した。いつも私と一緒にだった母は大晦日も元旦もなく朝から母乳を持って病院へ通い、夜遅く正にヨレヨレの体で帰ってきた。それでも休む間も無く私の世話をしてくれる母に「寂しい」なんて到底言えなかった。数週間が経ち、妹の容態が安定してきた頃、お見舞いに行くときと看護師さんが「今日は妹ちゃんを抱っこしてみない？」と誘ってくれた。妹を箱から出すには、管を外したりまとめたりしなければならず、大変な作業だと私は知っていた。た

だでさえ忙しい看護師さんにご迷惑だと思いつても返事を出来ないでいると、「大丈夫、妹ちゃんも喜ぶよ！」と言ってくれた。私はあの瞬間の胸の高鳴りを今でもはっきり覚えている。初めて抱っこした妹の命の温かさを腕に感じながら、妹を救ってくれた先生や看護師さんへの感謝が心から込み上げてきて、泣きながら何度も何度も「ありがとうございます。」と繰り返した。

それから数週間後、妹は退院することが出来た。しかし本当に大変な毎日はそのからだだった。例えば哺乳瓶の一番下の目盛りは二十ミリ。哺乳力が弱い妹は一回にたったそれさえも飲み切れない。その為何ミリ飲めたかを毎回詳細に記録する。脱水や栄養不良を防ぐ為だ。私は毎日何本もの哺乳瓶を消毒するのを手伝った。二歳近くなると妹は頻繁な通院に加え、立つ為に必要な筋力をつける理学療法や食べ物を飲み込むトレーニングなどを受け始めた。受験生だった私より忙しいスケジュール。それでも一つ一つ着実に乗り越えてきた。

そして今年、妹は私の学校の幼稚園に通い始めた。私と同じ制服を着て、私と同じメニューだが妹が食べやすいよう母が工夫を凝らしたお弁当を持って登園する。制服を着るのも時間ギリギリまで自分で頑張ろうとする根性があるし、お弁当を鞆に詰めながら「残さないで食べてくるね!」と可愛く宣言する程遅くなった。毎朝、そんな光景を見ながら私は全てのこと全ての人に感謝したい気持ちで溢れている。この幸せは妹の生きる力と、妹を支えて下さる全ての方々の思い、そのどちらかが欠けても成しえなかったかけがえないものだから。

私の大切な妹。あなたはまだまだ小さくて、これからも普通の人よりちょっとだけ乗り越えなければならぬ困難が多いかもしれないでもお姉ちゃんも協力するよ。皆さんも応援してくれるよ。だからこれからもこの幸せに感謝して前を向いて頑張って行こう。

茂田 美々莉（横浜市 中学校二年）

祖母の今、私の未来

なぜ祖母は毎日笑顔を絶やさずにいられるのだろうか。なぜあんなにも前向きに生きられるのだろうか。病気なのに……。

私の祖母は茨城県に住んでいる。家が遠いため年に三回くらいしか会う事が出来ない。しかし、会った時には必ず笑顔だ。いつも笑顔だ。私が叱られた時も励ますようにニコニコしている。だから、私の記憶の中では笑顔でいる祖母しかない。どんなにつらくても心配かけまいと笑顔でいる。あの時もそうだった。

二年前の冬。私と母と姉で東京のおばの家に遊びに行っていた。祖母も来ていた。外出先で祖母の具合が悪くなり。終いには歩けなくなってしまうた。祖母とおばは先におばの家に帰り、後から私たちも帰った。数週間後に、胃ガンと大腸ガンが発覚した。その頃の私はまだ詳しくは知らなかったが、母たちの様子で大変な病気だとわかった。だが、その事を知っても祖母は笑顔だった。思い返して

みると、具合が悪くなり帰った日も私たちの前ではずつと笑顔で「大丈夫だから、心配しなくていいよ。」と言っていた。さすがに私も少し無理をしていると感じた。けれども、決して私たちの前でつらい顔をしなかつた。

ガンになり、合計二回の手術をし、胃の四分の三を摘出し、人工肛門となった。人工肛門は、お腹に直接袋をつけ、そこにそのまま便をためるものだ。基本的には、三日に一回のペースでストーマーを交換しなければならぬが、調子が悪いと一日に一回や一時間一回などのペースで換えなければならぬ。その度にシャワーを浴びるため夏はいいが冬は寒くて大変だ。それでも、自分や病院をにくむことなく前向きに生活している。なぜだろうと考え母に聞いてみると、織り物が関係しているらしい。

祖母は、織物作家だ。家には大きな織り機があり、たくさんの糸と作品がある。私の家にも祖母が作った帯がある。さまざまな作品が賞に入った。その中で、文部大臣賞などの大きな賞を五つほどとっている。そんな織物

は祖母の生き甲斐となっている。その生き甲斐のおかげで祖母はあんなにも前向きで笑顔で暮らしているのだと思う。私にはそのような生き甲斐があるだろうか。

今、祖母のがんは他の場所にも転移してしまった。その悲しい知らせを聞いても、つらそうな顔、悲しそうな顔は一切見せず笑顔だった。生き甲斐があればこんなにも明るく前向きに生きられるとは知らなかつた。このように生きている祖母が大好きであり、尊敬している。私にもこんなすばらしい生き方ができるだろうか。

これからの人生に、どんな事があるかはわからない。しかし、前向きに考え明るく生きることが出来るだろう。祖母を見習い、私も生き甲斐を見つけて、笑顔で毎日を過ごしていきたい。

堺 理沙（藤沢市 中学校二年）

支えを受けて気付くこと

燦燦と太陽が照りつけ、正に真夏といわれる今は夏休みである。外は毎日三十度を超える暑さであり、私の体は限界に近づくにあたり調子を狂わせる。しかし、こんな日々でも毎日楽しい時間を過ごしている。なぜ楽しいのか。それは、「大切な人」と過ごしているからだろう。

私にとって大切な存在とは、その人といると自由でいられる、気遣いなく過ごせる、素の自分を出せるといった特別な存在である。私の特別な存在は家族だ。一番身近であり一緒にいると安心できる。全く不快感のないこの環境をつくってくれている家族一人ひとり、特別以上に、他に代わるもののない掛替えない存在といいきれる。

私は、父・母・姉との四大家族だ。三人に共通して強く言えることは、一生懸命であるということ、人のために何かをしようという努力があること。私には、何に対しても頑張る懸命さはあるのだろうか。目標を実現する

ための努力というものをしているのだろうか。手帳を時々振り返って見ると、ほとんど毎日コメント欄の最後の言葉が「頑張ろう」で終わっている。それに対する懸命さはどうだろう。一日必ず目標を持って過ごしている。その目標を達成しようとする努力はどこにあるのだろうか。

いつも一生懸命に働いている父は、しっかりと返ってきて、頼りになる存在だ。何でものりよく返ってきて、明るく、家族を温かい雰囲気にしてくれる。又、勉強のことに関しても、私が聞く前に父から声をかけてくれる。自分の予定を優先させてしまいその声に応えることができなかった時、本当に申し訳ない気持ちもありつつ、長い時間を裂いてまで私との勉強の時間に費やしてくれる父にとっても感謝している。大変な家事を一人でこなしている母。思いやりがあり明るく面白い。私に分からないことや調べたいことなどがあると、自ら調べてくれる。他にも沢山あり、普段から人のために積極的に行動に移す母に感謝している。そして、私のマイペースな性格に付き

合ってくれる姉。姉とは何でも打ち明けられる。言い合いをすることも少なくはないが、だからこそお互いを理解しあえる仲なのだと思ふ。夢中なことでもなくても熱心に取り組む姉の姿はこれからも見倣い続けたい。

父・母・姉は私の見倣うべき人であり、今まで沢山の支えを受けた分、それらを自分自身を成長させる力にして実行していかなければと思ふ。支えてもらった有り難さをそのままの気持ちで返す。当たり前のことなのに実行に移すのが難しい。

十三年間で家族からもらった多くの支え、学んだこと、その一つひとつの受け止め方に責任を持ち実行することで、私自身も、誰かに大切なものを与えられる人間になることができるのかもしれない。そうなるために、日々「大切」という言葉を感じ続けたい。

水田 楓（鎌倉市 中学校二年）

美しい風景

十四年。つまり、私が生まれてから今日まで。私はずっと同じ町に住んでいます。そして、私は地元・茅ヶ崎が大好きです。茅ヶ崎は、自然がいっぱいなのです。たとえば、波の音が家で聞こえたり、雨あがりのときは潮の匂いがしたり、大きな打ち上げ花火が家から見えたり！いいことも悪いこともあります。そんないろいろな自然に囲まれて生活できることは、とても幸せだと思います。

しかし、小学二年生までは、そんな考えはカケラもありませんでした。私の中で変化を与えたのが「東日本大震災」でした。

津波によつて、青い海は茶色の海に、家屋は崩れ粉々に、美しい町は消え瓦礫の山に。当たり前のように見ていたはずの風景が一瞬にしてなくなつてしまった映像をテレビで見ました。当時はまだ小さかつたけれど、強い衝撃を受け、目を見張りました。何度も何度も津波の映像を見ました。家屋がたくさん流されていく映像を見ました。

「こわい」

おそらく、東日本大震災を体験した人は全員思っていることだと思います。私も同じです。

それに、当時の自分と同じくらいの子供が海に向かって泣き叫ぶ姿は、五年以上経った今も脳裏に焼き付き、忘れることはありません。その光景をテレビ越しに見て、当たり前のように見ている地元の風景の大切さに気がきました。

小学生時代、私はよく友達や家族と海に行っていました。砂で遊んだり、シーグラスを探したり、きれいな貝殻を集めたり、海に潜ったり。私にとって、いつしか海は友達のような存在になっていました。

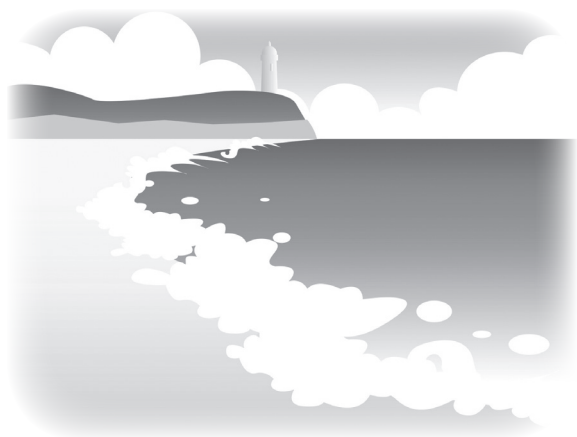
初日の出や地引網、浜降祭などのいろいろな催し物で見せる、それぞれの景色。私は年々地元の風景への愛が深まっていると感じています。

茅ヶ崎には、海に加えて山もあります。山がある北の方はさらに空気が澄んでいる上、市街地の景色は絶景です。

地元・茅ヶ崎には、美しい風景であふれて

います。私は、その茅ヶ崎が大好きで、美しい景色も大好きです。だから、その景色をずっと守っていききたい、地元・茅ヶ崎のいろいろな風景が、私にとって大切なものです。

田中 佑菜（茅ヶ崎市 中学校二年）



たいせつな名前

私の大切な物、それは「名前」です。名前は人生で初めてもらうプレゼントです。だから一生大切にされる物だと思います。

私の誕生日は八月十五日。終戦記念日の生まれで、戦争から帰って一年で亡くなったひいおじいちゃんの日も八月十五日。家族にとって大切なめぐり合わせの日に生まれた私の名前は「和恵」といいます。

お母さんの育児日記には名前をつけた人は、姓名判断のできる親戚のおじさんと書いてあつてちよつとシヨックでした。正直父か母がよかつたです。本当は母にもつけた名前があつたらしいのですが、しかし兄二人もそのおじさんに最終決定してもらい、健康にスクスク育つていったので、母の思いは心にしまい名前の命名という幸せな瞬間をだいたいにしてしまうことをさけたそうです。

母はいいいます。名前って意外に呼んでるとそれらしくなってくるもので、あの時自分の思いをおし通さなくて本当に良かったと思

う。「和恵ちゃん、かーず」と呼んでるうちに一番サイコーに思えてきた。ということでした。

その後、八月十五日という大切な日、平和に恵まれる世に、そしてあなた自身が和に恵まれるように、人を和し、人を恵んでいける人に。と父や祖父母、親戚のおじさんの気持ちを頂戴した母の心が育児日記に書かれていました。みんなの願い通りの人になつていきたいらいいなと思います。

私のもめ事が嫌いです。もめてる事柄の間に立つて仲裁役をする時もあります。どうしたらよくなるかを考えすぎて、しんどくなつてしまうこともあります。

でもこの名前にこめられる私への願いを思うとそんな人に近付いているのかなあーと思います。改めて名前は大切だと思いました。そして私以外の人、友達もみんな一人一人に大切な名前があつてそこにはその大切な名前があつてそこにはその大切な人を思う大切な人達が私のようにたくさんいることに気づきます。生まれて初めてもらったプレゼント一

生大切にします。

小島 和恵（厚木市 中学校二年）

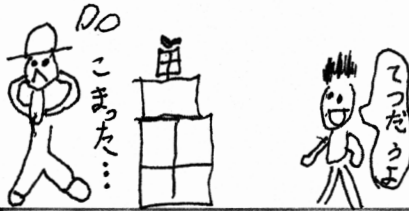


いっはに訪んでくれる



①

まじるとたすけてくれる



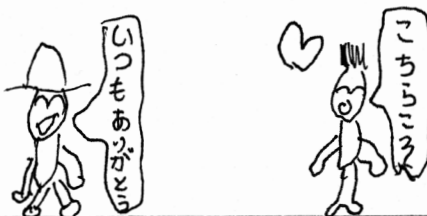
②

かなしい時には そばにいてくれる



③

友だちは大切だなあ

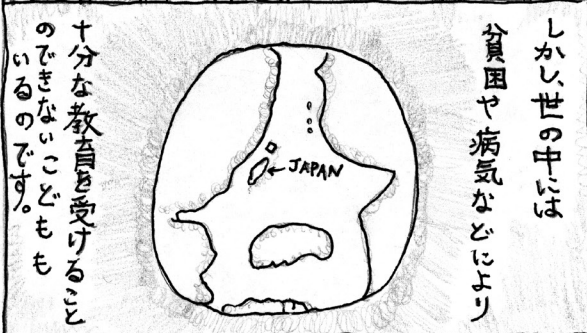


④



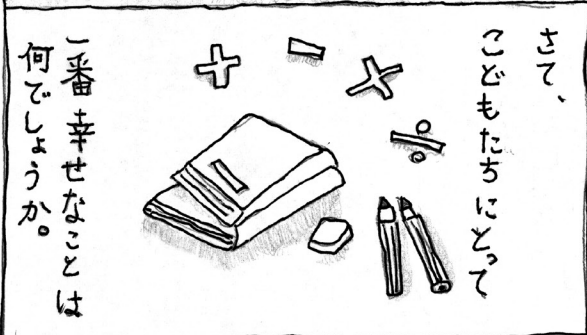
教育とは
子どもたちの

大切な
「生活の一部」でもあります。



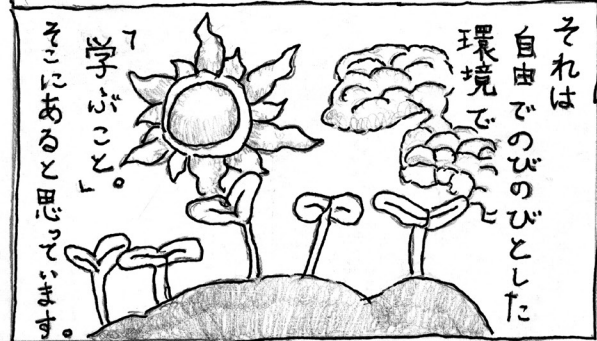
しかし、世の中には
貧困や病気などにより

十分な教育を受けられない
子どももいるのです。



さて、
子どもたちにとって

一番幸せなことは
何でしょうか。



それは
自由でのびのびとした
環境で

「学ぶこと」
そこにあると思っています。

子どもの権利に関する条約の主な内容

この条約は、平成元年（一九八九年）に国際連合の第四十四回総会で採択し、日本では、平成六年（一九九四年）に条約を批准しました。

主な内容は次のとおりです。

- 前文
 第1条
 第2条
 第3条
 第4・5条
 第6条
 第7・8条
 第9条
 第10・11条
 第12条
 第13・16条
 第17条
- すべての国のすべての子どもが人としての権利と自由を持つために十八歳までのすべての子どもが対象
 子どもが人種・性別・宗教・財産・障害などで差別されないように
 子どもにとつて何が最も大切（子どもの最善の利益）か
 子どもの権利を実現させるための親や国の責任
 子どもが生きるうえで一番大切な生命
 私が誰であるか。名前と国籍を持ち、守られる権利
 子どもが親と一緒にいる権利
 子どもが親とやむを得ず離れて暮らしても親と会う権利
 子どもが自分の意見を言う権利（意見表明権）
 表現・思想・宗教・プライバシー等の保護
 子どもが知りたい情報の提供

- 第18条
- 第19条
- 第20～22条
- 第23条
- 第24条
- 第25・26条
- 第27条
- 第28・29条
- 第30～35条
- 第36条
- 第37条
- 第38・39条
- 第40条
- 第41条
- 第42条
- 第43条
- 第44～54条

子育ては両親の責任

虐待・放任からの保護

子どもの保護・養子縁組

障害のある子どもの権利

子どもが健康に生きる権利

病院や施設を利用した子どもの保護と社会保障

子どもが人間らしく生活するための権利

子どもが平等に教育を受ける権利と教育の目的

自己の文化を尊重する権利・遊ぶ権利・就労・麻薬・性的被害等からの保護

子どもがおとなに利用されないために

子どもの自由が奪われた時の適正な扱い

子どもが戦争から守られる権利

子どもが罪を問われた時

条約と法律との関係

国の条約広報の義務

子どもの権利を守るために

条約の国等の手続きについて

あとがき

世界中の子どもたちの幸せのために作られた『児童の権利に関する条約』。この条約の中に、「子どもは誰でも自分の意見を表明する権利(意見表明権)を持っている」という条文があります。この作品集は、この意見表明権を確保する環境づくりの一環として作られたもので、今回で二十回目となりました。子どもたちに自分のことや毎日の生活の中で感じた様々な思いなどを表現してもらうことに主眼が置かれていることが特長です。

今回のテーマは「たいせつなもの、たいせつなひと」。子どもたちからは、家族や友達、命や言葉などのたいせつなもの、たいせつなひとへの思いがたくさん寄せられました。それぞれの作品には、自分を支えてくれることへの感謝の気持ちや日常の何気ない一コマの大切さなどが詰まっています。

いじめや虐待、貧困など、子どもを取り巻く環境が大きく変化していく中で、子どもたちは自分にとってかけがえのないもの、かけがえのないひとの存在を大切に、日々生活している様子が伝わります。子どもたちの気持ちをしっかりと受け止め、安心して生活できる未来を築いていくことが私たちには、求められているのではないのでしょうか。

今年度は、四百九十八点の応募作品があり、その中から入選作品三十一点を選出し、作品集としてまとめました。この作品集を読んでもくださった方が、子どもたちの作品ひとつひとつから、子どもたちが、今何を伝えたいのか、深く感じてもらえれば幸いです。

なお、昨年に引き続きより多くの方が子どもの作品に触れることができるよう、神奈川県人権啓発推進会議に御協力をいただき、第二十一回人権メッセ・ジ展において作品の展示を行いました。

最後に、作品の審査に御協力を頂いた、民生委員児童委員協議会、児童福祉施設協議会、市町村教育委員会、児童相談所の方々に感謝いたします。

神奈川県立総合療育相談センター 子ども人権推進事業普及啓発作品集事務局

この作品集は総合療育相談センターのホームページでも御覧になることができます。

神奈川県ホームページ → サイト内検索 [総合療育相談センター](#) → 階層リンク「普及・啓発事業のご案内」

こ せんよう でんわそうだんまどぐち
子ども専用の電話相談窓口
じんけん こ ほっとらいん
人権・子どもホットライン

こどものじんけんイロイロ

でんわばんごう
電話番号

0466 (84) 1 6 1 6

『あなたが生活している中で、困っていること、
言いだせないことがあれば、
どうしたらいいか、いっしょにかんがえよう。』

うけつけじかん まいにち あさ じ よる じ
《受付時間》 毎日・朝9時～夜8時まで。

げんぞく けんしよかんいき こ でんわ う 受けます。お住まいや相談内容によって、専門
の相談窓口を御紹介します。横浜市・川崎市、相模原市、横須賀市にお住まいの
方は、お住まいの地域から、児童相談所全国共通ダイヤル189に電話しますと、
地域を担当する児童相談所につながります。

* かな が わ けんりつそうごうりょういくそうだん まいとし がつころ こ けんりじょうやく
神奈川県立総合療育相談センターでは、毎年7～9月頃、子どもの権利条約の
ふきゅうけいはつ さくぶんなど さくひん ほしゅう しょうさい ほしゅうじき と あ
普及啓発のため、作文等の作品を募集します。詳細は、募集時期にお問い合わせ
ください。県のホームページでも募集のお知らせをします。

子ども人権推進事業普及啓発作品集
「たいせつなもの、たいせつなひと」

発行日 平成28年12月

発行 神奈川県立総合療育相談センター

〒252-0813 藤沢市亀井野 3119

電話 0466 (84) 5700 ファクシミリ 0466 (84) 2970

